

私たちの身代わりに死なれる救い主

ヨハネ福音書11:47-57

【新改訳 2017】

- 11:47 祭司長たちとパリサイ人たちは最高法院を召集して言った。「われわれは何をしているのか。あの者が多くのしるしを行っているというのに。」
- 11:48 あの者をそのまま放っておけば、すべての人があの者を信じるようになる。そうすると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も取り上げてしまうだろう。」
- 11:49 しかし、彼らのうちの一人で、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った。「あなたがたは何も分かっていない。」
- 11:50 一人の人が民に代わって死んで、国民全体が減びないですむほうが、自分たちにとって得策だということを、考えてもいない。」
- 11:51 このことは、彼が自分から言ったのではなかった。彼はその年の大祭司であったので、イエスが国民のために死のうとしておられること、
- 11:52 また、ただ国民のためだけでなく、散らされている神の子らを一つに集めるためにも死のうとしておられることを、預言したのである。
- 11:53 その日以来、彼らはイエスを殺そうと企んだ。
- 11:54 そのために、イエスはもはやユダヤ人たちの間を公然と歩くことをせず、そこから荒野に近い地方に去って、エフライムという町に入り、弟子たちとともにそこに滞在された。
- 11:55 さて、ユダヤ人の過越の祭りが近づいた。多くの人々が、身を清めるため、過越の祭りの前に地方からエルサレムに上って来た。
- 11:56 彼らはイエスを捜し、宮の中に立って互いに話していた。「どう思うか。あの方は祭りに来られないのだろうか。」
- 11:57 祭司長たち、パリサイ人たちはイエスを捕らえるために、イエスがどこにいるかを知っている者は報告するように、という命令を出していた。

【祈りながら考えよう】

- (1) 祭司長たちとパリサイ人たちが最高法院（ユダヤ人議会）を召集したのは、なぜですか。
- (2) すべての人がイエスを信じるようになると、どうして「ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も取り上げてしまう」と言えるのですか。
- (3) 神様は当時の大祭司カヤパを用いて「イエスが民の代わりに死ぬことによって、国民全体が減びない」と発言させました。イエスは何のために身代わりに死なれるのですか。三つの意味を説明して下さい。

【解説】

(1) 最高法院を召集した

死んで4日も経って墓に葬られていたラザロを生き返らすという奇蹟を、主イエスが多くの人々の見ている前でなされると、そこにいた人々はほとんどそれを見てイエスをキリストと信じた。ところが、何人かの人は、それをパリサイ人たちの所へ行って告げた。

その訴えを聞いて、「祭司長たちとパリサイ人たちは」公式の「最高法院を召集して」、どのような行動を取るべきか議論した。

「われわれは何をしているのか。あの者が多くのしるしを行っているというのに。あの者をそのまま放っておけば、すべての人があの者を信じるようになる。そうすると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も取り上げてしまうだろう。」(47-48節)

指導者たちは、もはや何もしないわけにはいかないと感じた。もし介入しなければ、すべての人がイエスを信じるようになる。その結果、民がイエスを王と認めた場合は、ローマとの関係が厄介になる。イエスが来たのは帝国の転覆を図ってのことだ、とローマ人は考えるだろう。そうすると、彼らは攻撃を開始し、ユダヤ人を罰することだろう。

「われわれの土地も国民も取り上げてしまうだろう」という表現は、ローマ人が神殿を破壊し、ユダヤ民族を離散させることを意味している。紀元70年に起きたことがまさにそれであった。しかし、それはユダヤ人が主を受け入れたためではなく、主を拒んだためであることを忘れてはならない。

(2) 大祭司カヤパの発言

するとその時、その年の大祭司であったカヤパ（紀元26-36年まで大祭司）が、宗教裁判の裁判長を務め、次のように言った。

『あなたがたは何も分かっていない。一人の人が民に代わって死んで、国民全体が減びないですむほうが、自分たちにとって得策だということを、考えてもいない。』このことは、彼が自分から言ったのではなかった。彼はその年の大祭司であったので、イエスが国民のために死のうとしておられること、また、ただ国民のためだけでなく、散らされている神の子らを一つに集めるためにも死のうとしておられることを、預言したのである。」(49-52節)

カヤパによれば、「ユダヤ国民がイエスのせいで死ぬ、という祭司長たち、パリサイ人たちの考えは間違っている」「むしろ、イエスはユダヤ国家のために死ぬのだ」とカヤパは予告した。ユダヤ国家全体がローマと面倒なことになるよりは、イエスが民の身代わりに死ぬほうがよい、とカヤパは言った。これだけを聞けば、まるでカヤパは、イエスがこの世に来られた本当の意味を理解しているかのようなのである。

(3) イエスの死の意味

大祭司カヤパはひとりの人物の死によって、自分たちユダヤ民族の生き残りを願ったものであったが、それが全く違った意味で、キリストの身代わりの贖いを指し示すものになった。カヤパが口にしたメッセージは神が与えられたものであった。イエスがイスラエル国家のために死ぬ、というのは神の預言であった。そのメッセージから、主イエスが十字架で死なれることの意味を三つあげることが出来る。

第1は、「民に代わって死ぬ」すなわち、身代わりの死である。身代わりの死というのは、私たちが罪のために死ななければならない運命にあるその死を、身代わりに引き受けて下さるということである。

第2は、主イエスは、ユダヤ「国民のためだけでなく」、全世界の人々のために身代わりに死なれるということである。ここに狭いユダヤ人主義からの脱却が示されている。

第3は、「散らされている神の子たちを一つに集めるために死なれる」ということである。この点については、すでに主が10章16節のところで教えておられた。「わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊たちがいます。それらも、わたしは導かなければなりません。その羊たちはわたしの声に聞き従います。そして、一つの群れ、一人の牧者となるのです。」

「この囲いに属さないほかの羊たち」とは「異邦人のキリスト者、すなわち私たちのこと」を指している。

(4) エフライムに待避する

その日以来、彼らはイエスを殺そうと企んだ。そのために、イエスはもはやユダヤ人たちの間を公然と歩くことをせず、そこから荒野に近い地方に去って、エフライムという町に入り、弟子たちとともにそこに滞在された。(53-54節)

パリサイ人たちはベタニアの奇蹟によっても納得しなかった。それどころか、神の御子に対しての敵対心は一層激しくなった。その日以来、彼らは今までになかったほどの激しさで、主の殺害を企てるようになった。

ユダヤ人の敵意が増していることを知って、イエスはエフライムという町に立ち去って行かれた。エフライムは、荒野に程近い、ひっそりした、人目につかないところである。

(5) 過越の祭りが近づいていた

さて、ユダヤ人の過越の祭りが近づいた。多くの人々が、身を清めるため、過越の祭りの前に地方からエルサレムに上って来た。(55節)

「ユダヤ人の過越の祭りが近づいていた」、という表現は、主の公生涯がいよいよ終わりに近づいたことを気づかせるものである。この過越こそ、主が十字架につけられるべき時であった。

民は、過越が始まる前にエルサレムに行って身をきよめなければならなかった。たとえば、ユダヤ人が死体に触れてしまった場合、儀式上の汚れからきよめられるために、一定の儀式を行わなければならなかった。

(6) イエスを捕らえる策動

彼らはイエスを捜し、宮の中に立って互いに話していた。「どう思うか。あの方は祭りに来られないのだろうか。」祭司長たち、パリサイ人たちはイエスを捕らえるために、イエスがどこにいるかを知っている者は報告するように、という命令を出していた。(56-57節)

人々は神殿に集まり、自国にいるイエスという名の奇蹟を起こす人物について考え始めた。はたして、イエスがこの祭りに来るだろうか、という議論が持ち上がった。来ないと考えた人の理由が57節に書かれている。

イエスの逮捕状が祭司長およびパリサイ人からすでに出ていた。イエスの行方を知っている者はだれでもそれを知らせなければならない、という命令であった。イエスを逮捕し、処刑するためであった。

